

Struggle and Misery in the “Three States”: The Case of the Writer Kim Tal Su

YOON Keun Cha

Abstract

Ever since Korea split in two, Korean residents in Japan have been caught between the North-South divide. Being forced to live between the “three states” of Japan and North and South Korea must have caused unfathomable pain to these residents, and particularly to the intellectuals among them. In this paper, I focus on one such intellectual, the writer Kim Tal Su. By examining his life and body of work, I will attempt to understand how the “three states” concept has influenced his writing.

「三つの国家」のはざまでの苦闘と悲惨 —作家・金達寿の場合

ユン・コオンチヤ
尹 健 次

在日朝鮮人は敗戦後の日本の地で南北分断の時代を生きた民族集団である。いわば日本・南北朝鮮の「三つの国家」のはざまで生きたことになるが、その個々の人生、とくに知識人の苦痛は計り知れないものであった。ここではその意味で、作家・金達寿の生きざまに焦点をあてて論じてみたい。実際、金達寿について論じることは、「三つの国家」のはざまでのたうち回った在日知識人のひとつの姿を描くことになる。金達寿について語ることは金達寿の文学を論じることにもなる。

キーワード：在日朝鮮人、在日朝鮮人文学、在日文学、金達寿、三つの国家

在日朝鮮人は敗戦後の日本の地で南北分断の時代を生きた。いわば日本・南北朝鮮の「三つの国家」のはざまで生きたことになるが、当然、その個々の人生、とくに知識人の苦痛は計り知れないものであった。ここではその意味で、作家・金達寿の生きざまに焦点をあてて論じてみたい。実際、金達寿について論じることは、「三つの国家」のはざまでのたうち回った在日知識人のひとつの姿を描くことになる。金達寿について語ることは金達寿の文学を論じることにもなる。

在日朝鮮人の文学については、別の稿で、植民地時代と解放後にまたがる形で、張赫宙、金史良、金達寿、許南麒、そして立原正秋、さらに

金石範や金時鐘などに焦点をあてて、民族をめぐる葛藤を中心にその大枠を提示したことがある¹⁾。ここではそのあと1960年代以降について、金達寿に的を絞って論じてみたい。文学のみならず、その生きざまについてである。金達寿は1986年に「僕の人生は、簡単に言いますと泥まみれの人生なのです」、「文学というのは、ある意味で自分の恥をさらけ出すことです」²⁾と述べている。

作家・金達寿の研究書はこれまで2冊出ているようである。崔孝先『海峡に立つ人—金達寿の文学と生涯』(批評社、1998年)と辛基秀編著『金達寿ルネサンス—文学・歴史・民族』(解放出版社、2002年)である。このうち、『海峡に立つ人』によれば、金達寿の文学は作品区分でいえば、「在日同胞生活史」の流れ、「社会主義者闘争史」の流れ、「古代史」の流れ、の三つの時期があるという。「在日同胞生活史」の流れは初期の作品で、植民地時代を含めて、在日同胞がさまざまな差別を受けつつ、“生”のために一生懸命に生きた姿を描いた時期である。つぎの「社会主義者闘争史」の流れは、『後裔の街』以後の長編づくりで溢れる情熱と意欲、使命感をもって、民族の正しい進路だと信じた〈社会主义改革〉の実現のための〈参与文学〉という色を帯びた時代である。「古代史」の流れは、1970年頃から始まる「日本の中の朝鮮文化」シリーズで、日本全国隅々まで歩きまわる丹念な作業をへて書き続けたライフワークである。ただ、崔孝先は、「社会主義者闘争史」の流れの作品群は、実際には「在日同胞生活史」の流れのなかに帰属すべきもので、在日同胞たちの生活の一面貌を描いたことに変わりはないという。その間、一貫して民族組織である朝鮮総連との軋轢がつづくが、1969年の『太白山脈』以降、「社会主義者闘争史」に属する作品は完全に書かなくなり、1979年『備忘録』を発表することによって、金達寿自ら組織からの断絶を公言したという。

こう述べたあと、崔孝先は、金達寿にとっては1964年から1970年までの6年間は、植民地時代からの精力的な創作活動が停滞する稀な時期となる。挫折と懷疑のなかを彷徨したはずのこの6年間をへて、金達寿は1970年以降、ようやく日本全国に残された古代朝鮮文化の遺跡を求めて歩き、21年かかって『日本の中の朝鮮文化』(全12冊)を完成させる。別の言葉でいえば、金達寿にとって、『太白山脈』の出版後、古代史探究に取り組み始めるまでの6年間はいわば「沈滯期」「虚無主義」の時期であったという。こうして民族主義から社会主義へ、そして社会主義から虚無主義へと、金達寿は二回の“転向”を経験しながら、しかしそれでも金達寿は一貫したテーマで文学の道を歩んだとされる。それは「挫折を知らない気高い〈抵抗〉」であったという。しかし私は、はたして金達寿はそんなに挫折を知らない一貫した人生を歩んだのか、抵抗とはいったい何に対する抵抗だったのか、疑問に思えてならない。

在日朝鮮人の文学に関しては、詩人・金時鐘や作家・金石範の仕事については議論が盛んで、文学論といった形でそれらの研究成果が出されている。その点、金達寿の場合にはまだまだこれからといった段階であるが、そのためには何よりも、金達寿の歩んだ軌跡をきちんと把握することが不可欠になる。私自身は崔孝先のいう金達寿文学の三つの時期区分は必ずしも適切だとは思わないが、便宜上ここではあえてそれに従うとするなら、まず「社会主義者闘争史」の流れという言い方に違和感がある。在日一世作家として民族にまつわる数々の歴史的悲哀を経験し、それに抵抗しつつ作品を書いたことは確かだとしても、それを「社会主義者」の「闘争史」として把握し、理解しようとするには無理がある。

社会主義闘争といえば個々に評価は分かれるとしても、朝連・民戦・総連で命をかけて闘った多くの活動家・「革命家」を思い起すが、金達寿の『わが生活と文学』(青丘文化社、1998年)を読んで見ると、金

達寿にはそこまでの信念や気負いは見られない。金達寿自身、朝連と雑誌『民主朝鮮』の時代、自分は共産主義者ではなく、ただ「親日派を葬れ、民族反逆者を駆逐せよ」という組織スローガンに大いに賛成したのは確かであり、その意味ではいわゆる「左派」の一人だったと、述懐している程度である。金達寿が民族組織の常任になるのは、1948年末頃からか、約半年ほど、朝連中央本部の文教部次長になったことくらいである。中央本部が東京駅八重洲口前のビルに移転し、『民主朝鮮』がそのビルに同居できたためだともいう。そして金達寿は1949年の5月から6月に日本共産党に入党するが、そのためにたちまち「党内抗争」に巻き込まれてしまい、ずいぶんバカなことで、人生の大事な部分をムダにしたと反省することしきりである。

総連結成後は新書『朝鮮』（1958年）に対する組織的「批判」があるが、その中にあって、在日文学者を含めた総連関係者との関係は切れてはいない。「民主集中＝唯一指導体制」を強めていくばかりの総連に嫌気がさしていたことは確かであるが、それでも1962年頃には在日本朝鮮文学芸術家同盟（文芸同）の非専任副委員長として週に1、2度、会議に出るようになる。しかしこれは金達寿の文章からするかぎり、文芸同の委員長が友人の許南麒であること、また韓徳鉢議長との知友関係を考慮してのことでのこと、信念としての社会主義を実践するためだったとまでは思えない。つまり韓徳鉢とは同じ慶尚北道の同郷ということで親しくした、という「浪花節的な関係」（金時鐘³⁾の側面が強かったのではないかということである。

挫折と彷徨

金達寿の文学を考えるうえで何よりも重要なのは、1964年から1970

年までの6年間、いわゆる「沈滯期」「虚無主義」とされる時期をどう把握し、理解するかであろう。それをどう扱うかによってその後の古代史探究の仕事の把握・理解も変わってくるし、もっと大きくいうなら、金達寿文学の全体をどう評価するかの問題にもつながっていく。一般的には金達寿文学は、骨太で、政治や社会の不条理・民族差別に対して厳しい姿勢を貫いたと言われてはいるが……。

金達寿の年譜を見ていて感じるのは、そのほとんどが作品の羅列で、個人の生活記録が抜け落ちていることである。『〈在日〉文学全集』第1巻・金達寿（勉誠出版、2006年）に所載されている年譜でいえば、金達寿の個人記録としては、出生、渡日、1944年の結婚と長男の誕生、（最初の夫人の病死につづく）1950年の再婚と1967年のその破綻・離婚、そして1975年の長男の結婚、くらいのものである。金達寿の「文学史」を書くならこれでいいのかも知れないが、実生活の変転と文学のあり方は密接不可分のものであり、その意味でも金達寿の内面奥深く、精神のあり方、彷徨、苦悩、葛藤、そして「頽廃」といったものを描こうとするなら、より個人史の実相に斬り込んでいく必要がある。それがひとつの時代を生きた金達寿の「精神史」であり、それはひいては「在日の精神史」の一部となりうる。

しかし実際問題として、ひとりの作家が歩んだ個人史を明らかにすることは並大抵のことではない。とくに金達寿の場合、隠された部分、明らかにされてこなかった部分が多く、たんに「在日朝鮮人の代表的な作家として、搖ぎない地歩を確実なものにしている」（張斗植）といったような「評価」がつづいてきた。もちろん、場合によってはプライバシーの問題にも関わってこようが、しかしそれよりももっと大事なもの、在日がどう生きたかを明らかにしておくことが緊要な課題であるはずである。以下、各種の資料を使いつつ、何人かから聞き書きした断片的な

情報をつなぎ合わせていきたい。

金達寿は『後裔の街』や『玄海灘』のあと『太白山脈』（1969年）を書くが、それは植民地・朝鮮での民族の悲惨と抵抗を描き、その延長線上で在日知識人の新たな生き方を模索するものであったと言える。「民族の問題」や「差別との闘い」を1960年代までは一人で背負おうとした感もあるが、実際、南北朝鮮での事件や在日朝鮮人に関わる問題が起ころたびにそれに正面から立ち向かおうとしたのは確かである。1959年12月に帰国船が出るや「北朝鮮へ帰る日本人妻」「帰るもの・留まるもの」を書き、1960年以後の韓国の政治状況の急変にさいしては「南朝鮮のデモ蜂起と抗争意識」「南朝鮮のクーデターについて」などを書いている。在日朝鮮人に関わっては「小松川事件の内と外」「李珍宇の死」「殺された趙鏞寿のこと」などを書いている。

しかし金達寿の生涯にわたる精神史という意味では、「日本の中の朝鮮文化」にのめり込んでいく時期、年譜に1967年に再婚が破綻し、離婚したと書かれていることの意味合いをもっと追求すべきではないかと思う。もちろん、その時期、金達寿は総連との軋轢が深まり、政治的に孤立するとともに、小説を書けなくなるという危機のなかにいた。なぜ小説を書けなくなったのか、それ自体、磯貝治良が言うように「金達寿のなぞ」⁴⁾としてある。しかしいずれにしろ、それから30年後、1997年5月、77歳で、金達寿は肝不全で死亡する。しかも、2003年末に金達寿の蔵書（書籍、雑誌、その他）は個人作家の文庫が多いことで名高い神奈川近代文学館に運び込まれる。「金達寿文庫」の開設であるが、在日朝鮮人文学者の蔵書が日本でも名のある文学館に入れられ、「文庫」にされたのはそれだけで大きな意義のあることである。ただ、文学館の資料によれば、「寄贈者：全玉寿、寄贈年月：2003.11.一、寄贈内容：原稿・創作ノート・書簡・執筆参考資料など10,230点（図書

5,530 冊 雑誌 3,470 冊 特資 1,230 点)」と書かれているのがどうも気になる。金達寿の蔵書が近代文学館に入庫されたときの寄贈者「全玉寿」とはいったいどういう女性なのか。それは金達寿とどう関わる人なのか。またそれは金達寿の文学生活にどんな意味をもつのか、あるいは金達寿の文学を評価するのにどう関連しているのか、という問題になってくる。

話は元にもどるが、さきにあげた『わが文学と生活』によると、金達寿は 1950 年暮れに、朝連本部の会計事務をしていたことのある在日二世の崔春子と再婚し、横須賀から東京・中野のアパートに移る。「彼女はまだ二十四、五歳だったが、一度結婚に失敗した女、というより、これはあとになって知ったけれども、女としての体はまだ「十二歳の童女」(医者のことば) だったため、結婚したばかりでわかれさせられた者であった。……まだ三十になったばかりの私は、「セチャンゲ(新しい結婚=処女をめとるということ)」もできたのであるが、どうしてそういう再婚者をえらんだかというと、私には五歳になる長男の章明という連れ子がいたからだった。……彼女からも子が生まれていたら、どうなったかわからないが、「十二歳の童女」の彼女にはそれができず、こちらの子が成長するにつれてその亀裂はますます大きくなり、ついに十七年目になってわかれなくてはならなかった。そういうことで私は、私の生活をよく知っている者からは「チョボク(妻福)のない男」とよくいわれたが、こればかりはどうしようもないことであった。しかし私は、十七年間ついに「すみません」ということばを一度も口にしなかった気の強い女に、ほとほとまいったが、その彼女にもいろいろと苦労をさせたことでは、いまもたいへんすまなかつたと思っている」と。

この『わが文学と生活』が出版されたのは金達寿が死去した翌年の 1998 年であるが、いま述べた部分は、まだまだ元気な 1980 年にすでに

活字になっている（『金達寿小説全集』第3巻、1980年10月）。相手がまだ存命中であったことからすると、金達寿はいろいろと計算して、あるいは決断して書いたのであろうが、いずれにしろ、とんでもない身勝手な言いぐさである。金達寿がその方面で「かなり派手だった」ことは確かにそうで、その言い訳であったのかも知れない。

金達寿は作家生活が軌道に乗り始めたとはいえ、貧窮の生活には変わりはなかった。再婚した崔春子（佐井利嘉子、佐井春子）夫人は東京・練馬区早宮に借地ではあったが、1956年末のことであろう⁵⁾、金達寿と協力して家を建て、それで家計をけなげに支え、子どもの面倒も見た。金達寿を訪ねて1泊した梁石日は、「畑の真ん中に建った二階屋だった。奥さんが畠仕事をしていたのを覚えている」⁶⁾と記している。大阪の金時鐘は金達寿とはすでに1950年代から家族ぐるみで懇意にしていたが、この「上京時の定泊所」に1週間以上も泊まったことがあるという。金達寿が薪で風呂を沸かしてくれたというのである。夫人はのちに生活のために、新宿で「伽耶苑」という焼肉屋を経営する。金達寿は作品世界に没頭するとともに、しばしば在日の作家らを自宅に招いて、酒席を設けて楽しんだ。新宿・歌舞伎町の酒亭「あづま」で常連の酒客と盃を酌み交わし、「アリラン」や「新羅の月夜」を歌って興じもした。

私の亡き妻・尹嘉子が高校を出て、大阪から上京し、デザインの専門学校で学ぶために下宿したのは、従姉（いとこ）であるこの崔夫人の家であった。1965年に入ってからのことだったので、すぐ近くに日本共産党員である画家の永井潔があり、デッサンの指導を受けるために毎日のように通った。その年には永井潔が23歳の尹嘉子をモデルに「レースを編む女」と題して20号の油絵を描いている⁷⁾。しかしそのうち、たぶん1966年後半から1967年にかけてのことであろう、金達寿は恩ある女優・北林谷栄の家で働いていた付き人の日本人女性に手をだし、

1967年に激怒した崔夫人と離婚するはめに陥る。文学的人間の弱さだというべきか、崔孝先のいう1964年から1970年という金達寿の「停滞期」「虚無主義」のど真ん中の時期のことである。ちょうど、総連・朝鮮大学校などで、思想総括の動きが急激になっていた時期でもある⁸⁾。

北林谷栄は1947年、宇野重吉や滝沢修らと民衆芸術劇場を設立。1950年には劇団民芸の創設に参加し、舞台、映画、テレビドラマなど幅広く活躍した戦後日本の代表的女優である。民芸の看板女優として30代から老け役を演じ、美しいおばあちゃん女優として知られた人である。1923年9月、小学6年生のとき、関東大震災で実家が焼けて火事の中を逃げまどい、虐殺された朝鮮人の遺体を見て強い衝撃を受ける。以後、在日朝鮮人に強い共感をもち、映画『オモニと少年』(1958年)『にあんちゃん』(1959年)、テレビドラマ『近くて遠い人』(1963年)などでチマ・チョゴリ姿の朝鮮人女性を演じた。時に在日朝鮮人の役柄を舞台でも演じていた北林谷栄は金達寿の仕事場にと、自宅の一室を使うようにと便宜をはかっていたのである。

このことは亡き妻が、私と1972年10月に結婚したあと、間もなく話してくれたことである。激怒した崔夫人は家を売りに出し、妻が住むところがなくなつて永井潔の居宅に転がり込んだという。妻は永井潔の母であるおばあちゃんに可愛がられ、また娘である永井愛（のちに劇作家・演出家）と楽しく遊んだという。あちこちで聞き書きしているなかで、このことについて訊いてみると、崔夫人が家を売らずに待つていれば、金達寿は帰ってきたはずだ、との言葉もあった。

時はながれ、崔夫人は（元）家族の誰からも顧みられることなく、2004年5月2日、杉並区の養護老人ホーム・浴風会松風園で急性呼吸不全で一人寂しく旅立っていく。最後に看取ったのは、私の妻だけであった。77歳であった。出棺に際して見送ったのは妻と私の二人だけで

あったが、献体に廻される遺体搬送車が老人ホームを出て東京医科大学に向かうとき、女の、とくに「朝鮮の女」の哀しみを感じざるをえなかった。私にとっては、決して忘れられない記憶である。

崔夫人は離婚して37年ものあいだひとり暮らしをし、晩年はホームで精神疾患・不眠・徘徊の孤独な日々であったという。遺品の中にはわずかばかりの預金と地銀およびコイン、それに金達寿と並んで撮った楽しそうな、夫婦円満そのものの写真が1枚だけ残されていた。金達寿はすでに1997年に同じく77歳で亡くなっているが、最後の最後まで、彼女にとって、金達寿が生きがいだったのだと思う。彼女の人生はいったい何だったのか、最後を見守ることもしなかった（元）家族。男と女の話は万国共通であり、出版界などではことさら話題にすることを避けるとも言われる。しかしそれにしても、金達寿は、民族や国家、歴史や文学を語り、在日朝鮮人作家として歴史に名を残すことになるが、考えようによつては、それはあくまで男の論理からするもので、家父長的・儒教的イデオロギーの「権化」ともいるべき体質を持っていたと言えるのかも知れない。

『日本のなかの朝鮮文化』の刊行

金達寿は1962年に「日本のなかの朝鮮文化」（『若い世代』）を書き、1970年にはそれまでの相模や武藏野、北多摩など、関東地域の朝鮮遺跡を踏査した成果として『日本の中の朝鮮文化』を講談社から出す。その前、1969年3月には京都に住む鄭詔文の経済的負担のもとに雑誌『日本のなかの朝鮮文化』創刊号が出版にこぎつける（京都・朝鮮文化社、1981年6月まで全50号）。この雑誌の編集は金達寿があたり、仕事の根拠地は京都になり、また実際にも、古代日本の中心地であった関

西の畿内はじめ、各地への取材旅行が急に多くなり、「旅」にあけくれ、各地で講演会もたくさんおこなわれる。

京都の実業家・鄭詔文は最初「ガチャンコ」といっていたパチンコ店の経営で成功した人である。鄭詔文は1955年、37歳の時、京阪三条駅近くの古美術店で白い壺に心がとまる。それは人肌の暖かみを放つ朝鮮白磁で、その出会いがそれ以後鄭詔文の人生の方向を決めることになる。白磁は鄭詔文にとって故国であり、祖国のたしかな手ざわりであり、自身の自己回復の手だてでもあった⁹⁾。鄭詔文の美術品蒐集が精力的になっていくなか、やがて金達寿と出会う。協同して朝鮮文化の雑誌を出そうと決めたのは1968年夏頃だったというが、それは鄭詔文そしてその兄の食堂経営者である鄭貴文が所属していた総連の反対をおしのけていってのことであった。鄭兄弟は二人とも「唯一指導体制」下にあった総連の盟員であるだけでなく、とくに弟の詔文は京都朝鮮高校の建設委員長などの任にあった。そのために、雑誌創刊にあたっては朝鮮人があまり表だってはならず、執筆者も上田正昭や司馬遼太郎、やや後に森浩一など、日本人ができるだけ表に出すようにしたという。京都大学文学部の図書室でこの全50号を手にとってみたことがあるが、たしかに充実した内容の、魅力的な雑誌であった。

さきに引用した『わが文学と生活』にはその間のことについて記述されているが、それに続けて、こう書いてある。「だが、その編集のすべてを、東京に住んでいる私がひとりですることはできなかった。で、さきに劇団民芸の北林谷栄のところに来ていて、当時はある音楽事務所で働いていた、会津出身の松本良子にたのんで、京都へつれて行くことにした。そして、京都のあるアパートに移ってもらった松本を編集部員とし、鄭兄弟のうち兄の貴文を編集兼発行人とした。もちろん社長・発行人は弟の詔文だったが、しかし、雑誌奥付面には別な意味での私と同じ

ように、朝総連の幹部役員だった彼はあまり前に出ないことになった。それはそれでいいとして、みんなまったくの素人ばかりだった。松本も演劇女子青年ではあったが、雑誌の編集ははじめてで、原稿の割りつけ、活字の号数、句読点のひとつひとつも、原稿のひとマスとなるということまで、納得してもらわなくてはならなかつた」と。

読みすすんでいて唐突に北林谷栄とか、松本良子といった人の名前が出てきて戸惑ってしまうが、当の金達寿の思考回路では、当然のごとく繋がっている。『わが文学と生活』にも引用されているが、松本良子は『季刊三千里』の最終号（第50号、1987年5月）、つまり金達寿が『季刊三千里』の編集の責任を負う最後の号に「『日本のなかの朝鮮文化』の十三年」という論稿を寄せている。編集・出版の苦労話につづけて、「その頃、金さんは、代表作『玄海灘』の続編にあたる長編『太白山脈』をある雑誌に連載中で、京都の嵯峨野、好きな半跏思惟像のある広隆寺近くに仕事場があった。月のうち半分は京都ぐらしだった」と書いている。これは個人の生活記録で別に取り立てていうことではないが、しかし金達寿の文学生活を考えるうえで、このことはそう簡単に見過ごすことのできないことである。

まず北林谷栄との関係は、と気になる。金達寿が1966年に出版した『後裔の街』は東風社から発行されている。思い出してみると、私の書斎の本棚にもその本が1冊ずっとおいてあった。前から、読もう読もうと思ってはいたが、実際に読んだのは『わが文学と人生』とほぼ同じ時期の、ここ2、3年のことである。四十数年間もほったらかしておいたことになるが、たぶん2008年12月に亡くなった妻の持ち物であったのだろう。そして本をひもといてみると、そこに『東風通信』という冊子が挟み込まれており（第1号、1966年4月10日）、北林谷栄が「金達寿さんについて」というエッセイを書いていた。

「朝鮮人に扮して」（『世界』1963年9月号）とこの「金達寿さんについて」によれば、北林谷栄が金達寿に初めて会ったのは日本共産党第6回全国協議会（六全協、、1955年7月）の少し前あたりの時期で、当時東京・目白にあった自宅で文京区文化懇話会というサークルの会員持ち回りの会合があったときだという。そのときすでに小説『玄海灘』などに特別の関心を抱いていた北林谷栄は、以後、十年以上も家族ぐるみで親しく付き合い、横須賀に暮らす金達寿のオモニを訪ねて、着ていたチマ・チョゴリを貰ったりもする¹⁰⁾。そこには日本の朝鮮支配、日本人の朝鮮人差別に対する心底からの義憤があった。「いつも政治的にも、社会的にも困難な課題をふくむところの問題意識を、一貫して暗部から曳きすり出していこうとする金達寿という作家は、いわば悲劇的な存在だと、わたしは痛ましく眺めるときがあります」と述べている。当人はカンカラカンと笑い、その大口に焼肉を投げ入れ、手と肩を振ってのし歩くが、「その壯健さは反ってわたしは痛ましさをかきたてられるのです」と語っている（「金達寿さんについて」）。しかし北林谷栄は、雑誌『世界』1989年10月号にエッセイ「「人間」を追いかけて」を書いてもう一度朝鮮のことに触れるが、そのときは「民族の問題は、とめどない枝葉をともなっていて、ほんとうに自分の力で追いきれない難しさをもつていると、あれを書いたのちも何度も思い知らされました」と記し、あれほど親しくしていた金達寿については何も述べていない。

結局、金達寿は、北林谷栄のところから二人の若い日本人女性を京都に連れていき、崔夫人と離縁したことになる。付き人だった女性は金達寿と暮らし、松本良子は朝鮮文化社でただ一人給料をもらう編集者として働く。まだ朝鮮大学校の教員であった金達寿の友人で考古学者の李進熙は、座談会や編集で活躍するが、総連との関係で誌面には登場せず、影で雑誌の刊行を支える。こうして雑誌の発行は順調に推移し、各種新

聞が好意的に紹介するなか、読者も漸次増えていく。やがて創刊1年後の1970年4月からは、上田正昭、金達寿を臨地講師コンビとする遺跡めぐりが組織され、毎回200名以上が参加する盛会となる。松本良子によれば、この遺跡めぐりは三十回つづき、各地で座談会やシンポジウムなどもそれに合わせて行われ、それとは別に月一回六か月の文化講座も3年おこなわれたという。中央公論社や新人物往来社から座談会集や論文集も刊行される。時あたかも、1972年3月に高松塚壁画古墳が発見され、日本で古代史ブーム・歴史ブームが一気に起きる。金達寿にとって「絶頂」のときであり、また日本人の朝鮮・朝鮮文化に対する理解が少なからず改善されていくことになったはずである。

もっとも、金達寿が総連組織から「宗派・分派」と攻撃され、東京・国分寺市教育委員会主催の市民講座や京都府主催の土曜文化講座を圧力で中止させられるのは、この頃、1970年代初期のことである¹¹⁾。しかし敢ていうなら、解放後からの金達寿の言動をみると、金達寿は北を信じたというよりも、許南麒そしてとくに韓徳鉢らとの関係で組織に参与してきたのではないかと思われる。実際、金達寿が1972年1月10日付けで総連議長・韓徳鉢に出した手紙のコピーが残っているが¹²⁾、それを見ると双方が互いに親近感をもち、なお会話が成立していたことが窺われる。それを断ち切るのはやはり「政治」の論理と現実であったと言える。

やがて『日本のなかの朝鮮文化』の発行は、その内実において少なからず切迫していくことになる。石油ショック以降の紙などの値上がりで制作費があがって赤字が大きくなっていく。総連からの圧迫も陰に陽につづいた。この間、金達寿個人に限ってみても、家賃、旅費、生活費、その他、何から何まで、鄭詔文が負担した経費はかなりの額に達したと思われる。しかも金達寿はやがて、横須賀時代から知っていた大阪在住

の全玉寿と親しくなり、元・付き人と別れるようになる。手切れ金を誰が出したのかといったことまで詮索したくないが、いずれにしろ付き人だった女性は東京に帰る。金達寿はこのあと、大阪ではそれなりに名の知られた大阪市阿倍野区北畠の住宅街にある彼女の家で一緒に過ごすことが多かったのではないかと思われる。全玉寿は未亡人であったが、元のダンナは大阪で大きなパチンコ店をいくつも持ち、喫茶店なども経営した商売人だった。最後は香港で不幸な死に方をするが、全玉寿はその後、事業を継承してマンションを経営するなど、さらに発展させていく。全玉寿は作家・張斗植の夫人の妹であり、そうしたことから関心があつたのか、大阪で同胞の文化事業を支援するなどしていた。朝鮮文化社の遺跡めぐりにもよく参加したという。

金達寿は植民地時代から横須賀に長く暮らした。同じく横須賀に住んだ張斗植と知り合って、文学を情熱的に語り合った。1936年にはガリ版雑誌『雄叫び』をつくり、二人はともに、日本大学に一時在籍する。1942年張斗植は全柱楠の長女・全甲寿と結婚する。張斗植は結婚直後に、金達寿につづいて神奈川新聞社で働く。全甲寿の妹である全玉寿はこうして、金達寿と近い関係にあった。『運命の人びと—張斗植遺稿集』(同成社、1979年)で、金達寿は張斗植を生涯にわたる「心友」であったと書いている。張斗植は1976年7月に『定本・ある在日朝鮮人の記録』(同成社)を出すが、そこで金達寿について、「いま、自分の妻にもいえないことを平気で言い合う仲である」と語っている。金達寿は張斗植一家を題材に短篇小説「雑草の如く」(『民主朝鮮』1947年6月)を書いている。

『日本のなかの朝鮮文化』は最初の予定では10年40号で終刊となるはずであったが、関係者や読者の強い要望もあって、50号まで続けることになる。40号(1978年12月)の「座談会「日本のなかの朝鮮文

化」の十年」では、上田正昭、司馬遼太郎、直木孝次郎、林屋辰三郎、森浩一、それに金達寿、李進熙が出席して、十年間を振り返っている。この前、1975年2月には金達寿・姜在彦・金石範・朴慶植・尹學準・李進熙・李哲を編集委員とする『季刊三千里』が東京で創刊されている。ついでにいうなら、この『季刊三千里』第12号（1977年冬）に〈第3回応募作品佳作入選〉として金英鐘「ある日の事」が所載されているが、この筆者は全玉寿の次男である。

乗り越えられない在日の壁

金達寿の最後の長編小説『太白山脈』が筑摩書房から刊行されたあと（1969年）、金達寿は文学から離れていく。1978年に『行基の時代』（朝日新聞社）を出すが、これは歴史小説といったところか。いずれにしろ、このとき金達寿はまだ61歳だったが、本来の文学者というわけでもなく、もちろん歴史学者でもない、という状況に置かれる。

『日本のなかの朝鮮文化』に関わった人に共同通信の藤野雅之がいる。鄭詔文が「うちの従軍記者」と読んだ人で、文化部記者、文化部長、京都支局長などとして、鄭詔文や金達寿と付き合ったが、そのホームページ「蓼川亭通信」(<http://homepage3.nifty.com/fujino/>)に次のような文章がある。「朝鮮文化社の遺跡めぐりに同行して忘れられない思い出に、鄭さんと金達寿氏の喧嘩がある。それは1970年代後半のある年のことだった。上田正昭さんと金さんが臨地講師となって、福井県敦賀市の遺跡めぐりに行った。……前夜、私は東京から敦賀に駆けつけ、鄭さんらが泊まっている宿に挨拶に行った。部屋に入ると、鄭さんと金さんが大声で怒鳴り合って険悪な雰囲気だった。同席していた上田さんが私の顔を見るなり「藤野さん、ここで見たことはオフレコでっせ」といき

なり言った。私は何のことかわからず「はあ」と答え、部屋を出るべきかどうか迷っていた。……喧嘩の原因は、今となってみればはっきりとは思い出せないが、雑誌「日本のなかの朝鮮文化」の編集部員の1人が辞めて郷里に帰ることになり、その退職金のことだったと思う。それが少ないので、もっと出してやれというようなことを金さんが鄭さんに求めたのである。しかし、当時は不況でもあり、鄭さんにしてみればそれは難しかったようだが、その理由を鄭さんは言わない。最初は静かな話し合いだったようだが、2人はしだいに激昂してきて、ついには互いに口を極めてののしり合うのである。考え方くがぎりの相手に対する悪口、罵詈雑言は、聞いていてだれも手のつけようがないくらいであった。朝鮮民族が激昂するとものすごいとは聞いていたが、これには正直驚いた。翌日、京都へ帰る電車の中でもそれは続き、京都駅に着いても喧嘩は終わらず、京都ステーションホテルのレストランに入っても続いた。……鄭さんは雑誌を出すために膨大な金銭を負担している。編集会議には金さん、李さんも毎回、東京からやって来て加わる。上田さんは京都在住だからよいが、東京から来る2人の旅費や宿泊費、日当など謝礼、会議後の食事代やバーの飲み代まですべて鄭さんが負担していた。もちろん2人の編集部員の給料も。2人の編集部員は金さんらが紹介した人だった。退職する編集部員が何年間勤めたのか知らないが、一定の退職金を払うことを決めるには、鄭さんにはそれなりの理由があるはずである。それに折からの不況は鄭さんの事業にも影を落としていた。……鄭さんは事業家だから、朝鮮文化についての学識はないが、そういう人がこういう活動を始めたことの意味は非常に大きい。金さんらにとっては一種のパトロンでもあっただろう。また在日朝鮮人として同胞に民族的な誇りを自覚してもらおうという鄭さんの願いもたいへん意義深いことであった。もっと言えば、朝鮮総連からの攻撃を受けてまで続けてきたこと

はさらにたいへんなことだと思われた。総連の攻撃に対しては、上田さんの陰からの支援もあったが、鄭さんは一人で立ち向かっていた」と。

少し長い引用になったが、この間の事情を知るのに必要だと思う。ここで編集部員とは松本良子のことであろうが、彼女は故郷の会津に帰り、「歴史春秋社」の編集者となる。不況のなかにあって鄭詔文が苦しかったことは確かであるとしても、退職金云々でそこまでいがみ合うとは思わない。もっと根本的なこと、金達寿の私生活の問題、生き方の問題があったと推測するのが妥当であろう。1970年代前半、金達寿は韓国の独裁政権を批判し、民主化運動を支援する側にいた。よく知られていることでいえば、1974年7月、いわゆる「民青学連」事件で死刑の求刑・判決をうけ、のちに無期に減刑される詩人・金芝河救援のために、東京でハンガー・ストライキを決行している。第1回目は在日朝鮮人作家の金石範、李恢成、詩人の金時鐘などが参加し、第2回目は、金達寿、李進熙、そして鶴見俊輔などが参加している。

その間、金達寿は望郷の念を押さえがたく、九州の対馬から遙か釜山を望み、それを紀行文ともいるべき『対馬まで』(『文芸』1975年4月号)を書くようになる。しかしそれに対し、鄭詔文は統一が達成されるまでは南北のどちらの土も踏まないという決心を固めていた。酒席で二人が議論するとき、このことで言い争ったともいうが、1981年3月、金達寿はついに『季刊三千里』の編集委員である姜在彦、李進熙らとともに、全斗煥政権の情報機関のペースに乗るかたちで、「在日僑胞受刑者にたいする寛容を請願する」という名目で訪韓する。金達寿自身、「政治的捕虜になってはならない」¹³⁾と自戒の言葉を発してきたにもかかわらずである。ここに至って鄭詔文と金達寿は決別するが、鄭詔文は最後に、「おまえとは決闘だ」とまで金達寿に言ったという。それは過ぎし方、金達寿への積もり積もった義憤の爆発であったろうと理解してよい

のかも。金達寿が37年ぶりに故国の土を踏んで、その見聞と感慨を描いた『故国まで』の出版は1982年（河出書房新社）であるが、それは紀行文というべきもので、本来の文学とは異なるものであった。

鄭詔文は『日本のなかの朝鮮文化』が50号（1981年6月）で終刊になったあと、美術館設立への夢をつのらせ、私財を投入してようやく1988年10月、自宅のあった京都市北区紫竹にその名も祖国統一を念願した壯麗な「高麗美術館」（館長・林屋辰三郎、理事長・鄭詔文）を開館する。しかしその開館式典にも、開館記念祝賀会にも金達寿の姿はなく、理事会のメンバーにも名を連ねなかった。在日の亀裂をさまざまと見せつける情景であったが、美術館の開館まもなく鄭詔文は帰らぬ人となり、その後半年して、金達寿は李進熙とともに美術館を訪れ、杖をつきながら八瀬靈園の鄭詔文の墓前にぬかずくことになる。

詩人の金時鐘は鄭詔文の葬儀のことについて、つぎのように書いている。「葬儀場の山門を街路の角までもはみ出て参列者はつづき、四台もしつらえてある香炉に、焼香の列は延々と、一時間余りもしぶきをついて掌を合わせていた。……死を痛む悲しみとはうらはらに、かくも多く多くの追慕の情を呼び起こしているひとりの在日朝鮮人の、生きこし日々の至福の末期とも思えて胸が熱かった。……祖国が統一されるまでは帰らない、と言い張って、鄭詔文さんは北へも南へも行けずじまいでの生涯を閉じた。……読経のあいだ、居るべきもう一人の人がいないことは、なんとも悲しく寂しいことであった。鄭詔文さんの積年の夢がようやく具現した財団法人高麗美術館開館の日にも、交友の長さ、深さからして、華やいだ賑わいのなかに当然その方は居るべきはずの人であった。……お二方の交友途絶には「在日の壁」といったものを感じずにはいられないのだ。「そこらへんのシャチヨウさんたちと全く同じ言い方で、強権政治下の韓国経済を称賛している」とは、鄭詔文さんのものさ

びしげな苦い言葉であった。同床異夢というよりは、祖国に対するお二方のユメの見方の違いだったようにも、今更ながら思う」¹⁴⁾と。金達寿についてはあらかた知っているはずの金時鐘ではあるが、それなりに感情を抑えた書き方ではある。

転機としての韓国訪問

金達寿等が訪韓したとき、李進熙によると「韓国の報道機関は、私たちの主目的についてはふれずに、反韓派をも歓迎する新政策にのっとって、左翼の在日知識人たちが故国を訪問した、という趣旨の報道をした。いっぽう、朝鮮総連系の『朝鮮時報』（1981年4月9日）は、「民族の虐殺者にへつらう」裏切り行為だ、と非難の声をあげている」と述べている¹⁵⁾。もとより文学、とくに在日の文学と政治は切り離せないものであり、『季刊三千里』の編集委員であった金石範が、金達寿たちが独裁政権の韓国に訪問したと激しく反発して、編集委員を辞任したことは当然の成り行きである。事実、金達寿の訪韓は在日社会に衝撃をもたらし、金達寿と袂を分かった在日知識人も少なくない。金達寿自身、思想的に、あるいは人格的にも、大きな転回をし、それは「転向」だと評されもある。さきに引用した藤野雅之は共同通信記者として、金達寿の訪韓時にたまたまソウルにいたが、つぎのように述べている。

「光州事件の翌年の1981年3月、金達寿、姜在彦、李進熙氏らが韓国を訪問したとき、私は第3世界演劇祭の取材でソウルに滞在していた。韓国のマスコミは大々的に報道し、全斗煥政権は彼らの訪韓を政治的に利用した。私はソウルの景福宮の国立中央博物館で彼らに会った。日本でもこの訪韓は大きく報道され、金達寿氏らへの批判が高まった。……日本では彼らは当時投獄されていた金芝河や徐兄弟の減刑釈放嘆願を目

的にしたが、そういう目的など吹っ飛んでしまったような韓国での報道ぶりだった。帰国して、私は金達寿氏に会ったが、もう話は通じなかつた。私は在日朝鮮人が韓国を訪問することには理解できる面もあった。ただ、政治的に利用されることは明らかだった。一文学者として訪問してほしかった」、「金さんは盟友である鄭さんに今回の訪韓について事前に話してはいなかつた。それに近い話は、訪韓前に紀州の司馬遼太郎さんの別荘で、司馬さんや鄭さん、金さんらが集まつた際に出たらしい。鄭さんの立場は明確で、金さんが将来、軍事政権下の韓国に行くのに反対であった。……それで金さんは、いよいよ訪韓する段になつて、事前に鄭さんには相談しなかつたのである。……この訪韓事件で鄭さんはついに金さんと袂をわかつた」、「東京に戻つてから金達寿氏に新宿で会つた。彼は韓国が近代化を遂げ、経済が発展していることに驚嘆したようで、手放しで韓国を礼賛した。軍事独裁政権と政治犯釈放については何もいわなかつた。戦後初めて祖国を訪問し、発展した祖国の姿を目の当たりにした感激が私などの想像をはるかに超えるものであることだけは理解できたが、政治犯の釈放という当初の目的がどこへいってしまったのかという私の疑念は結局は晴れなかつた」、「金氏らはその前に、作家の李恢成氏が韓国を訪問したときにはこれを厳しく批判していたのである。訪韓した李氏が転向したわけではなかつたのだが、自分たちが韓国へ行くとなると、そうした李氏に対する批判との整合性が必要だつたのだろう。要するに理由が必要になつたのである。それが政治犯の釈放嘆願であった。……金達寿氏は日本社会で活躍する在日朝鮮人作家の重鎮として在日の人たちの指導的立場に立つてきつた。戦後長く韓国の人々を批判する存在として大きな影響力も及ぼしていた。その金氏がこういうかたちで韓国を訪問したことには在日社会で批判の声が高まつた。…… 私はそういう金達寿氏をそば近くで見ていて、怒りというよ

り、ある「悲惨」な思いに包まれてしまった。そしてその後、私も金氏と会うこととはなくなった」。

またまた長い引用になってしまったが、訪韓後、金達寿が友人・知人から指弾され、孤立を深めていった状況が分かるようである。新しい文学作品を書くためにも韓国に行きたいと言っていた金達寿であるが、それもほとんど幻想に終わってしまう。逆風が吹くときは前に進めるが、追い風が吹くようになったらおしまい、と誰かが言っていたが、まさにその通りである。北から南のファッショ政権への転換は、それ自体、人格の歪みないし破壊をもたらしてしまう。在日知識人の結集体であった『季刊三千里』は以後大きく変わらざるを得なくなり、その終刊後、金達寿を中心に韓国一辺倒ともいるべき雑誌『季刊青丘』（青丘文化社、全25号、1989年—1996年）が出されるが、もとよりそのレベルは低いものとならざるを得なかった。編集長を務めた考古学者の李進熙は最後まで金達寿にくつついていった数少ない一人であるが、金達寿がそれでもおおらかさというか、人を寄せ付ける気質をもっていたのに対し、李進熙はそういうものもなく、冷たい印象、感情を表に出し、金達寿なしでは生きられないといった感じをもたせる人だった、ともいう。

解放後在日朝鮮人の夢であった北の社会主义祖国が金日成の独裁体制の国と化し、片や南の韓国が朴正熙の軍事クーデターに始まる開発経済で高度成長を遂げていった時代、日本・南北朝鮮の三つの国家のはざまに生きた在日知識人は、誰もが、難しい選択を迫られていくことになる。離婚、京都での暮らし、総連との絶縁、韓国への傾斜というこの時期、金達寿は小説を書くのではなく、雑誌の編集や評論執筆に力を割くとともに、「日本の中の朝鮮文化」に主たる活躍の場を見出す。とするなら、紆余曲折を経た金達寿にとって、また在日知識人の文学にとって、その「日本の中の朝鮮文化」はいったいどんな位置を占め、どう評価される

のであろうか。ここで、解放後、作家の張赫宙が「民族」の葛藤を抱えながらも「帰化」して、日本社会に埋もれていき、また立原正秋が同じく「帰化」して、「日本中世の美」に拠り所を求めていったことが思い起こされる。

金達寿には、古代史に関する著作としては『日本の中の朝鮮文化』シリーズや『日本古代史と朝鮮』（講談社、1985年）などがある。これらの著作は彼の小説作品の読者層を超えて影響を与え、司馬遼太郎らの日本人文学学者からも一定の理解を得る。日本史の教科書で戦後も長く使われてきた用語「帰化人」が「渡来人」に書き換えられていくひとつの原動力となったとも言える。その意味では肯定的な役割をになったが、ただ、その主張には多くの日本語を朝鮮語由来とする荒唐無稽な朝鮮起源説、何でも朝鮮古代文化に結びつけていく、といった批判も聞かれ、学問的には当初から少なからぬ疑問点があったことになる。井上光貞・関晃・平野邦雄といった日本古代史学界の主要メンバーから厳しい反論を受けたのもその例であろう。臨地講師のパートナーであった上田正昭からですら、「困ったことに金達寿さんは何でも朝鮮に関連づけられるんです」と言われる始末である¹⁶⁾。しかも文学者として、「転向」とか「節操のなさ」といったことが論じられ、政治的には総連側から「民族反逆者」とか「堕落分子」と指弾され、あるいは韓国への傾斜が問題視されるなど、さまざまな点がある。しかしそれでも、好意的にいいうなら、金達寿は「日本の中の朝鮮文化」をライフワークとすることによって、良かれ悪しかれ、最後まで在日朝鮮人として「民族」にこだわりつづけたということはできる。金達寿は日本人の朝鮮観や教科書問題、外国人登録制度の問題、その他で時事的な評論なども少なくなく、その意味では、金達寿は民族的な「主体性」をある程度堅持しつつ、在日朝鮮人が歴史的に背負ってきた民族問題・植民地問題の課題に対しても、一定程

度の役割は果たしたということにはなる。

ただそうは言っても、北から南への、しかも親日的軍事ファッショ政権が支配する南への説明なしの、急な転換は、在日朝鮮人の歴史性からするときそう簡単に容認しうることではない。在日知識人の存立基盤は何よりも日本の植民地支配に抗い、自民族の独立を確保しようとする抵抗精神にあったはずである。それは個々の知識人のものというよりは、「在日朝鮮人」という共通の基盤に立つ普遍的な意志力としてあった。解放後の政治状況でいえば、たとえ旧宗主国の中華人民共和国に暮らす在日知識人であっても、日本の植民地支配に由来する南北分断を一日も早く解消し、統一祖国を実現する意志を持続させていくことが不可欠であった。いわば祖国・朝鮮の運命と切り離して在日、とくに在日一世の文学活動を考えることはほとんど意味がないという時代状況であった。忘れてならないのは、金達寿は在日二世でも、三世でもなく、植民地時代から文学を志した在日一世の知識人だということである。金達寿は宴席で酒が入るとよく立ち上がって、両腕を軽く振りながら踊ったというが、朝鮮の民謡を口ずさんだのであろう。しかしそれは在日知識人にとっては、「民族」のひとかけらでしかない。

金達寿の場合、当初はその方途をそれなりに北の社会主义に求めようとしたが、組織との軋轢や個人生活の問題とも絡んでであろう、内なる葛藤があったにしろ、いとも簡単に開発独裁の南へと転換してしまう。金達寿と一緒に訪韓した姜在彦や李進熙も同じである。韓国の民主化運動に参与した詩人の高銀は、1987年6月の韓国「民主化宣言」後、翌年11月末によく日本に来ることができたが、大阪での講演でつぎのように語っている。「韓国のテレビにちょくちょく出てくる。金達寿先生、李進熙先生、姜在彦先生だ。彼らは韓国にやってきて、日本の中に韓国がいっぱいあると自慢して歩く。……七〇年代には同志だった千

寛宇という歴史学者は、八三年に私が出獄してみるとすっかり変わっていた。ひとつだけあげれば、彼は上古史・古代史にまい戻っていった。そこに今日のわれわれの歴史的根源を認めようとした。その学問的な重要性を無視するわけではない。しかし当時、それは明らかに現実からの逃亡であった。なにも山の中にひっこむことだけが逃避ではない。それは時間からの逃避をも意味するのだ。言いかえれば、日本に韓国の昔の姿があるということに殊更に熱をあげたり専門化したりする理由には、いま厳然としてある韓日関係や民族の現実から目をそらさせ、陶酔・麻痺させる役割が隠されているのかも知れない¹⁷⁾と。

まあ、それでも金達寿は、日本と朝鮮という関係からすれば、在日知識人として日本人に一定程度、民族問題・植民地問題を説くことができたのは確かである。それはいい意味での、いわゆるナショナリズムの言説としても成り立ち得る。しかし在日知識人という原点に立つていうなら、そのナショナリズムは内なる問題とどう格闘するかを前提とするものである。親日派の問題、社会主義の問題、官僚主義や独裁の問題、ファッショ的権力体制の問題、組織との人間関係の問題、不義や偏見・差別の問題、等々、それらをめぐる内なる葛藤、対決を日々経験するなかでのナショナリズムであるはずである。日本人に民族的自覚やナショナリズムの重要性を語ろうとするとき、それはつねに、自らのナショナリズムの貧困と苦闘することと同時進行のものである。別の言葉でいうなら、主体性とは、本来的にはどこに依存するかではなく、どう自立するかの問題であろう。それは所詮、孤独な闘いであり、要はそれを貫徹できるか、どうかではなかろうか。

作家・金達寿をどう評価するのか

金達寿の最後の仕事となった古代史探求をどう評価するのか。1970年に出した『日本の中の朝鮮文化』の「まえがき」には、「私はひとりの文学者ではあっても、けっして歴史学者といえるようなものではない」と記されている。しかし仕事そのものはやはり「文学者」のものとは言えず、古代史学者のような書きぶりである。専門家からすれば間違いや誤認、誤解も多いのかも知れないが、読んでみると面白いことは確かである。在日同胞であれ、日本人であれ、金達寿の古代史シリーズを愛読した人は多い。しかしそれでも、「文学者」を自認したはずの金達寿という視点でみると、それは文学本来のものとはいせず、ましてや分断時代を生きざるを得なかった在日朝鮮人文学者の本来の責務をおろそかにしたものと言わざるをえない。お茶をにごした生き方の産物、といえば、あまりに酷であろうか。天皇（制）にたいする日本人の支持・賛成がつねに90%を超える日本社会で、講演会に多くの人たちが集まり、本がたくさん売れるということ自体、私には疑惑の対象として浮かび上がる。たぶん金達寿は日本社会に一家言もつ在日知識人の代表的人物と見なされながら、いわば日本社会に消費される商品として重宝がられたと言ってよいのではないか。日本人は、リベラルや左派も含めて、金達寿を読み共感することによって、過去の罪科を忘れた「平和日本」に安堵し、「朝鮮文化」に癒しを見出そうとしたのではないか。

よく金達寿は在日朝鮮人文学の根を植えた人と評価されがちであるが、晩年になるほど文学者仲間や友人・知人との関係は疎遠になっていった。文学者の尹学準にとって金達寿は「師匠」であり、金達寿からすれば尹学準は「愛弟子」であったが、しかしこれも最後は決裂してしまう。ど

こかで書いたことがあるが、尹学準は日本に密航してきたとき、京都にいるパチンコ屋の叔父に世話になる。この叔父が商売を派手にして多額の資金を方々からかき集め、最後は倒産してアメリカに逃げる。尹学準そして金達寿はこれに巻き込まれ、亀裂が生じる。たぶん尹学準の願いで金達寿が自分の友人から高利をエサにまとまった金額を融通してもらったのであろう。在日の文学者はただ原稿を書いていればいいというのではなく、思想やイデオロギー、組織関係で苦労すると同時に、在日同胞間のもめごと、とくに金銭のトラブルから自由でないのが常である。聞くところによると、尹学準は背負った「負債」を必死になって返済したというが……。

1997年5月に金達寿が亡くなったあと、7月に東京・中野の「サン・プラザ」で「偲ぶ会」が行われ、翌年5月に『追想金達壽』が青丘文化社から出版される。高柳俊男によると追想の一文を寄せた58人のうち、日本人は42人、朝鮮人16人であり、日本人の多くは出版編集関係者であり、しかも朝鮮人では、金達寿文学に続く在日朝鮮人文学の書き手たちの名がほとんど見られないという¹⁸⁾。私が執筆者一覧を見ても、交友関係のあった金時鐘、金石範、李恢成、安宇植らが寄稿しておらず、かろうじて梁石日が一文を寄せているだけである。梁石日を除いて、文学者の名前はない、といっても過言ではない。

しかしそれよりも驚くのは、追悼集に駐日韓国大使の金太智が「大韓民国」を代表して挨拶の言葉を述べている文章が所載されていることである。もしかしたら代読だったかも知れないが、これは文脈からして偲ぶ会での挨拶をそのまま活字にしたものと思われる。金達寿が韓日の文化交流にたいへんな貢献をしたと褒め称え、韓国政府は「銀冠文化勳章」を授与すると。思い起こしてみれば、アメリカ占領軍の検閲で活字にはならなかったが、金達寿は1950年6月の朝鮮戦争勃発後、「『大韓

民国』問答—これが『大韓民国』である」という 65 枚の原稿を書いている¹⁹⁾。「『大韓民国』というのは李承晩南朝鮮政権のことをいう」が、「それは一九五〇年六月二五日、その自らの挑発によって、この日を命日として、これ以後われわれの視界から永久に消滅していく運命にある」と。それは「わが偉大な金日成將軍の偉大な戦略戦術と、この將軍の指導の下にある人民軍の英雄的な戦闘力、および朝鮮人民の勇敢な闘いとその測り知れない犠牲とによって、……」腐敗しきった大韓民国は消滅したというのである。

それから 47 年の歳月がながれ、金達寿はその大韓民国の代表者に褒め称えられ、勲章まで授与される。その間、金達寿自身による思想転換に関わる説得的な主張ないし弁明があったとも思われない。民族問題・植民地問題という在日一世の文学者・知識人が抱えた全的な課題からするとき、金達寿の生涯はいったい何だったのか。金達寿はたぶん寂しがり屋で孤独で、時代に弄ばれながらタヒヤンサイ（他郷暮らし）の深い悲しみを持ちつづけたのではないかと思われる。金達寿の死後まもなく、NHK 教育テレビが「金達寿・海峡からの問い合わせ」を放映しているが（45 分、1997 年 7 月 30 日）、それは金達寿の肯定的な側面を示すものである。文学は人間の回復を目指すものであり、人間の回復は民族の回復に依らねばならず、それは自己の回復であるという。私は金達寿の人生を、そのひとコマひとコマを批判するだけの「正義」をもちあわせてはいない。そんな自信はとてもない。しかしたとえ金達寿の精神の内奥が「民族」的なものであったとしても、自己の民族内部の問題、そして分断克服の問題をも含めた意味での歴史的課題にどう対処しようとしたのか、あるいは放棄してしまったのか、というとき、そこにおける真摯さはやはり弱いものであったと言わざるを得ない。

東京で発行された『季刊三千里』や『季刊青丘』の編集者であった佐

藤信行によれば、『季刊三千里』創刊（1975年2月）のとき、金達寿の原稿を調布に取りにいったというから、そのときにはすでに調布に居を構えていたことになる。年譜によれば、長男の章明は1975年に結婚しており、二階屋の1階で暮らし、2階に金達寿が住んでいたという。金達寿は1981年3月に訪韓するが、そのときはまだ調布の家で暮らしていた。しかし家庭内に複雑な問題が生じたのか、その後中野のマンションに移って、ひとりで暮らす。そして金達寿の死後、佐藤信行と同僚の魏良福が、中野のマンションで蔵書の整理をし、本はいったん新宿・歌舞伎町の青丘文化社で保管される。全玉寿は大阪で金達寿記念館を設立しようと、2、3年のあいだ土地を物色し、さまざまに努力をするが、結局うまくいかず、やがて金達寿と縁の深い講談社の阿部英雄の仲介で、2000年頃から神奈川近代文学館に働きかけることになる。李進熙と魏良福が文学館と交渉し、2003年11月から3回にわたって蔵書を運び込み、金達寿文庫が開設されることになる。著作権は文学館が引き継いだとのこと。

こうしたことを見てみると、1970年前後以降、金達寿の活動は「内縁の妻」といっていいのか、全玉寿の献身的な支えを得たものではなかったかと思われる。それは何人かの女性を不幸にした上でのものであろうが、金達寿が自らそのことについて記録を残していないのが残念である。ただ、金達寿の仕事において、それでも、在日女性が少なからぬ役割を果たしたことは記憶しておいてよいだろう。もっとも、そうはいっても、金達寿が「三つの国家」のはざまで苦闘したとはいえ、分断時代を生きる在日文学者の責務をおろそかにしたことはやはり「悲惨」であったと言わざるを得ない。南北分断下にあって、在日文学者・文化人、とくにその中でも一世の使命は、日本の民主化と同時に祖国統一であり、それは南北の対立・体制競争に加担することなく、南北分断の克

服に努力することであったのではないか。その点、在日の精神史を語ろうとするとき、金達寿の評価はそう単純なものではないと思う。

注

- 1) 尹健次「在日朝鮮人の文学—植民地時代と解放後、民族をめぐる葛藤」(『人文学研究所報』No.52、神奈川大学人文学研究所、2014年8月)。
- 2) 金達寿「金史良と私」(『朝鮮人』No.24、朝鮮人社、1986年6月)。
- 3) 『論潮』第6号、論調の会、2014年1月。
- 4) 磯貝治良「金達寿のなぞ」(『新日本文学』No.589、金達寿追悼小特集、1998年3月)。
- 5) 西野辰吉「中野から練馬へ」(『金達寿小説全集』第1巻、月報3、1980年6月)。
- 6) 梁石日『修羅を生きる』幻冬舎アウトロー文庫、1999年。
- 7) 永井愛「跋 光と闇と緑と白と—尹健次詩集に寄せて」(『尹健次詩集 冬の森』影書房、2009年、所収)。
- 8) 李進熙『海峡』青丘文化社、2000年。
- 9) 備仲臣道『甦る朝鮮文化—高麗美術館と鄭詔文の人生』明石書店、1993年。
- 10) 北林谷栄『九十三歳春秋』岩波書店、2004年。
- 11) 金達寿「備忘録」(『文芸』1979年8月号)。
- 12) 神奈川近代文学館、所蔵。
- 13) 金石範「「太白山脈」続篇を」(『金達寿小説全集』第7巻、月報2、1980年5月)。
- 14) 金時鐘「白磁の骨壺—望郷の蒐集家・鄭詔文氏を送る」(『在日文芸 民濤』第7号、1989年6月)。
- 15) 李進熙「三月の訪韓について」(『季刊三千里』第26号、1981年5月)。
- 16) 辛基秀編『金達寿ルネサンス』解放出版社、2002年。
- 17) 高銀「韓国では文学は何を意味するか」(『在日文芸 民濤』6号、1989年2月)。
- 18) 高柳俊男「三人の金氏の追悼文集を読む—『追想金達寿』『追悼金広志』『物理学者金徳洲』」(『コリアン・マイノリティ研究』第2号、1999年6月)。
- 19) 注(12)に同じ。